

ダム建設期間における子どもの遊戯活動の変化に関する考察 ～ 奈良県川上村大滝ダム～

study on a change of children's outdoor play under the construction of a dam
～ Case study on Ootaki Dam in Kawakami village ～

古川 大輔*, 佐藤 洋平*

Daisuke FURUKAWA, Yohei SATO

はじめに

近年、ダムの見直しが盛んだ。長野県知事田中氏による「脱ダム宣言」はその代表だ。また、平成 15 年 3 月末で水利権免許の期限切れを迎える熊本県荒瀬ダムは昨年 12 月に撤去宣言をした。ダムに掛かる論戦は主に【1】公共事業による景気対策という揶揄【2】自然環境問題の二点に重きがあり、住民の生活の視点は軽視される。殊に、子どもの自然における遊戯環境という視点の議論は皆無である。子どもの山川での遊びは教育的にも重要であり、ダム建設による環境変化と子どもの遊戯活動の関係を調査する必要は多分にある。

前回の研究結果と本研究の目的

山村地域の遊戯活動を集落単位に着眼して調査した結果、自然系の遊戯活動の頻度は「仲間」の大小によって決定されるのではなく、都市への近接性や家庭における教育環境の違いが規定要因であると結論づけられた。だが、そこでは環境の同質性という仮説に疑問もあがった。そこで、本研究は、子どもの自然での遊戯活動とダム建設の進捗状況に着目し、詳細な集落の遊戯空間の違いを検証すること、また、時間軸による過去と現在の比較調査^{注1)}による検証を目的とした。

対象地奈良県川上村と大滝ダム



奈良県と和歌山県をまたいで色付けされたこの地域は「紀の川（吉野川）流域である」

図1 紀の川（吉野川）流域と大滝ダムの位置

対象地は吉野杉で有名な林業の村、奈良県吉野郡川上村である。奈良県川上村の大滝ダムは平成 14 年に完成し、平成 15 年 3 月から、試験湛水を

始めた。予定総貯水量が 8400 万 m³ である。また、建設方法において、全部ダムに沈む 4 つの集落は、標高に対して平行に移動した場所に、集落移転をし、代替住宅地を造成した^{注2)}。

現在と過去の比較

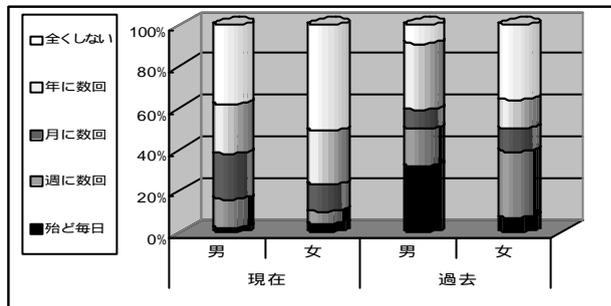
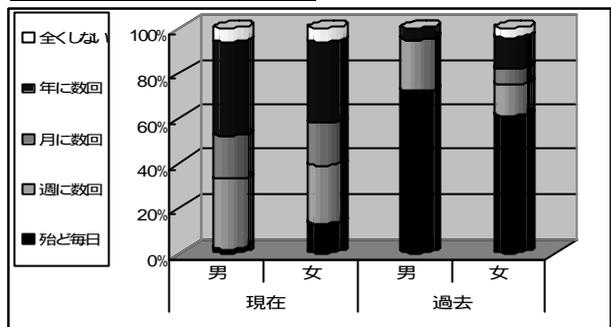


図2 川泳ぎの頻度の比較【川】

図3 山での探検・基地作りの頻度の比較【山】

自然系の遊戯活動は、山〔基地作探り探検・虫捕り〕と川〔泳ぎ・魚とり〕がある。川での泳ぎについて、過去の男子は 殆ど毎日 が 72% であり、週に数回と合わせると 95% である。一方、現在の子どもは、頻度が少ない。殆ど毎日と週に数回を足すと男子は 33%、女子は 39% である。頻度はかなり激減している。山での探検・基地作りについて、過去の男子と女子は、川遊びに比べて頻度が低いが、殆ど毎日と週に数回くらいを足すと 50% であり半数を占める。現在の子どもにおいては、川で泳ぐよりも頻度は低い。本ダムの影響で集落移転をし、代替住宅地へ移動した集落は少な

く、他の集落では近所の山の環境変化は全くない。にもかかわらず、山での遊びは激減している。これは虫捕りに関しても同様であった。

ダム建設年史と児童推移・室外での遊戯活動の頻度の関連性

下の図4は左 y 軸は児童数、右 y 軸は放課後の室外遊戯活動の割合の平均値を表している^{注3)}。

ダム建設史を追うと、昭和 63 年にダム周辺地区の新国道が完成した。勾配が急峻になり、児童が簡単に自転車で移動が困難となったが、ダム堤体周辺集落環境はコンクリート打設の始まる平成 8 年過ぎまで変わらない。コンクリート打設が終了した平成 14 年までにも、実際のところ、ダムの堤体より下流の水質は大きく変貌しておらず、河川での遊戯活動は可能な空間ではあった。頻度の減少要因は環境とは別の要因にある。

ヒアリング・考察・結論・課題

住民への聞き取り調査によると、堤体の下流に最も近い集落に住む保護者は、コンクリート打設を開始した平成 8 年より後に水質が悪化したという。濁土調査を行ったが、透明度は高かった。筆者の調査によると、平成 12 年の長野県長谷村の三峰川のほうが濁度は明らかに悪いが、長谷村の子どもたちは「川きれい!」と叫び川遊びに夢中になっていた事実がある。だが、さらに調査を進めると、問題となるのは水質水量変動による影響である。平成 8 年以降、仮排水道路を通し人工的に流量制御して下流へ放流したため、滞留が起こり、コンクリート細粒子が付着するようになる。水質は良いとき悪いときと変動するが、それにより、河床のコケが増加し付着していた。

また、本村では、両親が自分の子どもの頃との比較し、汚いと判断し、子どもへの河川遊びを遠

ざけさせたという因果関係がある(堤体下集落のみ。)だが、よく遊ぶ児童もあり、すぐ真下の本流へ行って川遊びをしていた。

結論を述べる。コンクリート打設が始まる前は、周辺環境は大きな影響を受けておらず、遊戯空間は存在している故に、室外遊戯活動は極めて現象しない。しかし、コンクリート打設後、堤体の直下の集落においては河床の「コケ」による環境変化がみられる。また、実際は泳げぬほどではないが、親の汚いから行くなという比較判断や過保護による原因で、河川に行く頻度が減少している。

今後は、支流しか遊べなくなる。明らかに頻度が減少する。その後の追加調査を行うことが今後の課題である。

【注釈】注1) 現在とは、平成 13 年、小学校 3 年生以上 6 年生以下の児童と中学生を示す。アンケート項目に中学生は「もっとも外でよく遊んでいた時を思い出して、夏の遊びとしてお答えください」と条件提示した。回答者：男子 n = 52 人、女子 n = 55 名であり回答率は 98% である。過去とは、昭和 53 年以前生まれの人で、川上村出身の人を対象とした。男 n = 22、女 n = 29 である。放課後の室外の遊戯活動の割合は 80% が 8 割以上と回答。昭和 30 年代後半から外での遊戯活動に大差はない。

注2) 図を参照。本村において平成 13 年に児童のいる集落 21 のうち、集落移動をしたのは 4 つであり、大半は移動していない。

注3) 室外での遊戯活動の割合について、アンケート回答者が小学校高学年時のときの割合として図に載せた。また、平成 4 年から間が開いているのは、現在高校生や大学生などで村外に出ている住民が多くデータ取得が不可能であったためである。

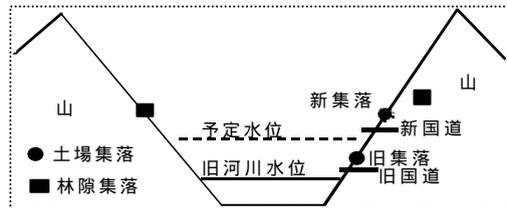


図 5 集落の位置関係
【参考論文】古川大輔・佐藤洋平；過疎地域における集落別児童数と外遊びとの相関～山間地域奈良県川上村を事例として～(2002年 農業土木学会)

域における集落別児童数と外遊びとの相関～山間地域奈良県川上村を事例として～(2002年 農業土木学会)

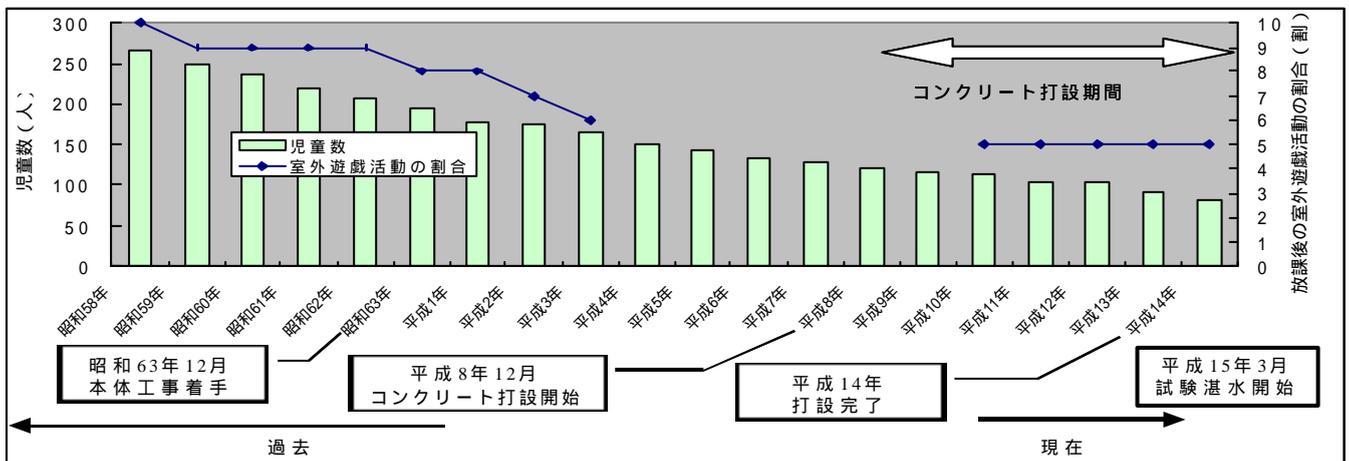


図 4 児童数の変遷と室外での遊戯活動の変化(ダム建設年史を背景に)